

民権思想の地域的特質について

橋本 正信

(1) はじめに

後進地域において民権思想がどのような形で移入され、どう吸収され、発露していったか。全国的な動きの中で地域の実情を考慮しながら、近代日本の進路を模索した、地方在地の民権家や知識人の言動の中から、その思想の一端を究明していきたい。本県では、「東北の三傑」といわれた民権家本多庸一、民権派から言論界の重鎮となった陸実、後の羯南言論による知識人小川涉の三者をあげ、論述する。

(2) 本多と小川

青森県の民権思想を代表するものとして、本多庸一があげられる。彼が中心となって結成した政社「共同会」の創立趣旨は、「国権を拡張して日本帝国の安全を図り、民権を伸張して生命財産の安全を図る」ことであり、それも、地方の土地、風俗、知識の程度を考慮して、地方独自の結社をつくることであった。また県下に配布した国会開設請願の檄文や、陸実、今宗蔵らと協議した国会開設建白書の内容には、国政参与を

天賦の権とする進んだ民権思想の裏に、人智、産業を発達させ、聖旨をもって国運の隆盛をはかるという国権的民権論があらわれていた。さらに民権の対立を人心の不和とし、地域の実情を考え、官民調和的、穏健な改進黨的（自由党には加盟）民権論でもあった。かような民権思想のよって来たる基盤には、本多を中心とする士族民権派の思想的背景や、当時の本県のおかれた地域的特質を考慮せねばならない。

本多自身、自由民権を唱える上にもっとも重要な意味をもったのはキリスト教の立場からであった。戊辰の役の際、藩論一定しない津軽藩において、ついには佐幕派へ身を投じ、戦敗者となり、横浜留学によって日本基督公会に入り、のち弘前日本基督公会を組織し布教に務めるのである。陽明学からキリスト教へ、そして自由民権思想へのめざめは、時代を批判し、時代と戦わんとする彼の姿勢であった。彼の盟友菊池九郎が慶応義塾留学後、弘前に設立した東奥義塾の教育は、宣教師ジョン・イングを招いての進歩的教育であった。本多も義塾の教師として、留学生から民権思想を受容する機会に恵まれていた。

共同会も東奥義塾の教師によって占められ、雑誌「開文」の発行や、弁論会の開催は、民権思想を醸成する素地をつくっていた。

しかし、非開明的な本県において、民権思想は封建思想にかわるものではなかった。この輸入思想が、文明開化の恩恵に浴しにくかった本県にまで入りこみ、土着の思想と結びつく時、それを拒否し阻害する条件がいかに多かったことかは、想像にかたくない。このような実情を指摘し、人民の奮起をうながし、それ故に国会開設尚早論を唱えた一言論人がいた。小川涉である。陸実と共に青森新聞記者として活躍していた小

川の尚早論は、特に岩手の日進新聞や盛岡新誌から手痛い批判を受けた。だが本県の民権思想の地域的特質を、逆の立場から裏づけるものとして、この論のもつ意味が大きい。

小川は、人民を八才以下の女子や無知な商人に譬え、知識と精神の熟さない地方人民の実態をあげ、「国会開設は人民を惑わす迷夢なり」とした。さらに人民は国会のなんたるかも知らず、その機能に耐い得ないというよりむしろ「患害」を生ずるとまでいう。国会を開設して、人民を開明させるという論には組みせず、人民「進取の気象」の乏しきを憂い、人民の知識、精神の向上をはかることが肝要だとする。彼にとつて政治より、教育的解決を要求したのである。彼の人民観は、遺著「陸奥事情」にあらわされている。この中では、青森県の人民をして、無気力、無知識、鄙屈、固陋、怠惰なりとし、教化に浴せず礼讓を知らざる者とさめつけた。しかし、こうさせた責任を、もっぱら為政者の無為無策に帰し、その資質の向上を訴えているのであり、政府の立場を弁護しているのではなく、優秀な指導者による誘掖引導の方法を求めている。この実感は、彼が役人、県会書記、記者生活を通して、地方人民により多く接触して来た上での嘆きであり、逆境からくる時代への批判精神でもあった。彼はもと会津藩士であり、戦敗者として下北へ移され、薩長奸賊の思いに燃えていたが、民権運動にはめざめ得なかった。本多のように留学の機会に恵まれなかったのも一因であろう。しかし、多くの斗南藩士が時流に乗じた中で、彼は時代に批判的な教育者（後にキリスト教徒）として一生を送るのである。本多がキリスト教に一生をささげたのと一脈通ずるものがある。

(3) 陸と小川

青森新聞の同僚陸は小川をこう評している。「和漢洋の学を身につけた篤学之士であつた」（吉田十郎『山鹿元次郎小伝』）。小川は諸学間に貪欲な開化を示した。陸は、同紙一〇〇号代から二〇〇号代にかけて編集長を務めた。明治十二年四月の「賄征伐事件」で司法省法律学校を退学処分となり、郷里青森県に帰郷してから翌十三年九月北海道紋別製糖所に赴任するまでの間であつた。その間同十二年四月二十二日の筆禍事件では、小川に代わつて若い陸が負つてゐるという（伊藤徳一『東奥日報社史』、小川喚三談）。翌十三年四月十三日筆禍事件も陸になつてゐる。北海道へ渡る契機の一つである。同十三年二月二十八日付「非国会論者ニ告ク」は陸筆とされ、彼は同年三月十七日青森蓮華寺の国会開設建白會議に参加し、二十一名の委員の一人として、建白書作成に関与し（青森県総覧）力量を発揮した。が、空想的民権論にあきたらず、後、「日本」主宰となり在野的論陣をはるのである。小川も寄稿している。小川は青森新聞第四三四—五号「圧制の仇敵」で新聞紙条例、集会条例を批判し筆禍にとわれている。

小川思想は、まず神学と儒学を当時、会津藩校日新館にて学び、後に江戸昌平黌に留学することによつてさらに深めた。日新館の教育については、彼の著書である「会津教育考」に詳しいが、藩主や、有司の「誘掖薫陶の深切なる」として、彼の一生を支配するのである。斗南藩になつてからも日新館は再興されている。会津松平家は代々神道であり、

小川家も由来神学であった。が日新館は儒学にも力を入れ優秀な者、昌平黉へ進学させた。小川はこの藩主の恩義に報いる為、賊軍の将となった藩主放免運動にも奔走している。

蘭学の勉強は、維新の激動期に外人に接することによってなされている。藩命を受けて新潟から武器調達の際、長岡藩士の河合継之助と意気投合、フランス人より汽船を買収したり（小川涉著「しぐれ草紙」）、戦後オランダ人カステールの家に招かれて、オランダ語、フランス語を学んだ。そこから秘かに、外国に思いを馳せたが、意を遂げなかったようである。彼は「父母居ます時は遠く遊ばず」の語を守っていたようで、そのことが、新思想受容の障害になっている。

しかし、彼は信仰においても仏化こそ深めたが、キリスト教に対しては大きな関心を払っていた。よく聖書を読み、後明治三十七、八年頃には洗礼を受けている。漢学を学ぶ青年に『天』という言葉もある。…教会に行きなさい」と勧めていたという（小川喚三談）。

彼が斗南藩士として下北（今の田名部）へ移住し、同志と共に深刻な生活問題に直面した時、外人を呼び酪農による開拓を試みた。その後、弘前のイング、本多も訪ねたという。現在の日本基督教団田名部教会が小川の屋敷跡とされている（吉田十郎前掲書）。筆禍事件で罰金や禁固に処せられた彼は、明治政府を批判し「孝明天皇を殺し、強盗的な手段で三百年禄を喰んだ幕府を倒し、然も幕府の政策をそのままめすみ、幼帝を笠にして勝手な事をして居る。維新は百年続かない……神が許し給う筈がない」と公言していたという（小川喚三談。「父を当時変人、奇人扱いしておったが昭和二十年の敗戦で見事父の言葉があたった」とし

ている。）。

彼は交友関係においても多岐に渡り、本多の紹介と思われるアメリカ婦人の学校建設に尽力、キリスト教への理解を示すと共に、長女を入学させている。同三十年代には、福沢諭吉等が小川宅に寄っている。「時事新報」に時々寄稿していた（しぐれ草紙、小川喚三談）。

彼は民権期において、明治政府の方針や、中央論壇に展開されている思想を斟酌し、彼独自の思想を形成していった。当時の民権論者の中に「思想の単純なる者」や、士族民権に特に「封建的愚民観」があった時、また県内において国会開設請願の会議が「封建復古会議」と間違えられて驚いている（青森新聞同十三年三月七日）ことを思う時、彼の思想が時代を大きく認識していた意義を見い出す。

陸は津軽藩士の子として生れ、東奥義塾、宮城師範学校、司法省法学校本科（フランス法学）で学び、以後曲折を経て同二十一年新聞「日本」を創刊、主筆兼社長となった。国民主義を掲げ、在野精神のリーダーとして君臨する。将に「名山名士ヲ出ダス」である。

(4) おわりに

陸は小川と親戚であり、その教えを受け思想は共有していた。三者の共通項は地域の後進性を把握していたことである。本多や陸は郷里への苦言を呈し、小川は県民を鼓舞している。同じ戦敗者として共通する本多と小川を分けたのは、西洋文明の受容の違いである。また本多には同志がおり、彼が民権の影響を受けて帰郷した時、義塾の学生伴野雄七郎

献言で、本県の運動を開放したと想定されており（小野久三『青森県政治史』、小川はその機会に恵まれなかった。しかし、小川が青森新聞発行を通して、陸と共に本多らの国会開設請願の集会や、その動静の取材に歩いており、本多の影響を受けていた向きがある。本県の民権思想の中に、士族民権として、かかる地域的特質を伺い知ることが出来る。

（はしもと・まさのぶ 弘前大学国史研究会会員）